教室談話における教師の「ハイ」の機能

-話題の完成という観点から-

山元一晃

キーワード：教室談話、フィラー、応答詞、間投詞、ディスコースマーカー

1. はじめに

ある上級の日本語学習者が、他の学生や教員の前で発表するときに、「ハイ」という言語形式をよく挿入し、違和感をもったという日本語母語話者の話を聞いたことがある。発表という談話の性質上、発表の途中に質問が行われるとは考えられないため、あいづちや応答の「ハイ」とはいえず、ここでは、ある種のフィラー[1]として用いられていると考えられる。一方、同じ言語形式を、聞き手の質問がほとんどない教室の談話で教師が、同じように用いたとしたら、全く違和感がないのではないだろうか。

教室談話においては、あいづちや応答の役割を果たさない「ハイ」という言語形式が教師によって、よく用いられる。対話や講演などの談話では「ハイ」という形式は、あいづちや応答以外には、ほとんど用いられないが、教室談話では、ほかの談話に比べ圧倒的に多く用いられる[2]。石井(1997a)では、教室談話に特有の言語形式がみられると主張され、また、茂呂(1997)でも、ある人や集団には、話し方の「型」があると主張されているように、「ハイ」がよく使われることも、教室談話の特徴的な「型」にあてはまっているからであり、教室談話に特有の「ハイ」の役割があるためではないかと考えられるのではないか。教室談話での「ハイ」の機能を分析することにより、先述の学生の「ハイ」の使用の不自然さを説明できると考えられる。

本稿では、２時間分の教室談話の詳細な分析から、「ハイ」には、「ひとまとまりの話題が完成したことを示す機能」という中心的な機能と、「一度流れをとめ、生徒の注意をひきつけ、教師の意図通りに次の指示や発問をする機能」や「それた話題をもとに戻す機能」があることを主張する。

2. 「ハイ」の役割に関する先行研究と本稿の立場

---

[1] 本稿では、「フィラー」という用語を山根(2002:49)および野村(1996)を参考に「それを削除しても発話の実質的意味が変わらず、本来的意味をもつものについてはその意味から離れて用いられる、発話の一部分を埋める語句」と定義して用いる。

[2] 山根(2002)でも、取り上げられている４種類の談話(講演の談話、留守番電話の談話、対話、電話の談話)すべてにおいて、ほとんど現れてこない。各談話のフィラー総数に対して、いずれも 1%未満である。一方、本稿で取り上げた資料(学習塾の中学３年生向け社会科の教室談話１時間分)では 6.8%が「ハイ」であった。また、小学校国語科の教室談話を取り上げた石井(1997)にも「「はい」「じゃあ」「さあ」「ちょっと」の多用が見られる(p.21)」と述べられている。

学校などにおける日本語の教室談話における研究は、それほど多くないが、最近では教室談話の構造を分析した研究(茂呂 1991、茂呂 1997)や、教室談話における繰り返しの機能の研究(熊谷 1997a)、教室談話でよく現れる表現に着目した研究(石井 1997a、1997b)などがある。

石井(1997a、1997b)は、教室談話では、「はい」「じゃあ」「さあ」が現れやすいとして、実際の教室談話を分析して、それぞれの役割を考察している。「はい」に関しては「教師が次の指示のためにそれまでの流れを区切り、注目をひきつける機能をもっている(1997a、p.23)」と述べられており、「じゃあ」「さあ」とともに「授業を予定どおりに管理・進行しようという教師の意識と密接なものがある(1997a、p.23)」とされる。他の言語形式との共起から、その機能を分析した点は興味深く、また「はい」に談話を管理する機能があると示しているものの、それ以上の言及はない。

一方、教室談話以外も含めた「ハイ」に着目した研究は、冨樫(2002)などがある。冨樫は、応答でもあいづちでもない「ハイ」を「トピックの切れ目に現れる(p.138)」としており、「提示された情報が不完全(中途半端な)ポイントでは(p.140)」現れず、「情報がある程度まとまった形で提示された後か、あるいは逆に全く出ていないポイントのどちらか(p.140)」で現れるとしている。また、同じように用いられる「ハイ」と「ウン」を比較し、「相手に提示できるような形で完成された情報の場合は「はい」が用いられ(p.141)」るとしている。

本稿では、「ハイ」が談話のどのような場面に現れやすいのかを観察することにより、その機能を分析する。石井では「はい」「じゃあ」「さあ」と分けて考察しているが、そのうち「ハイ」のみを取り上げ、また、前後の文脈からその機能を考察する。石井の「注目をひきつける」以上の役割を果たしていることを主張する。また、冨樫は作例により「ハイ」の機能を分析しているが、本稿では自然談話においてどのように現れるのかを考察することで、機能を明確化する。また、同じ場面の一部を変えることで、「ハイ」の挿入が自然になったり不自然になったりすることからもその機能を考察する。

3. 分析資料の概要

本稿で分析に用いた資料は、千葉県内の学習塾における中学３年生むけ社会科の授業２時間分の文字化資料である。教師の年齢は２１歳(録音当時 2006 年 8 月)。授業は詳細なプリントが配布されており、授業はそのプリントにそって行われる。生徒の発話や教師の問いかけはほとんどみられない。また、文字化にあたっては、山根(2002:224-225)を一部改訂したものを用い、分析は、フィラーの形式ごとに分けて分類し、フィラーの総数に対する割合を算出した。その結果は表１に示した。

分析に用いた授業２時間分(教室談話１：1 時間 7 分 40 秒、教室談話２：1 時間 5 分 37 秒)の資料中、2020 例(教室談話１：991 例、教室談話２：1029 例)、32 種類のフィラーが確認された。「ネ」が最も多く 1086 例(53.76%)、「エー」が 289 例(14.31%)、「マア」が 243

例(12.03%)、「ハイ」が 123 例(6.09%)、「アノー」が 101 例(5.00%)[3]みられた。「ハイ」をフィラーに含める山根(2002)では、4種類の談話(講演の談話、留守番電話の談話、対話、電話の談話)のいずれでもフィラー総数に対して1%未満に過ぎない。一方で本稿ではフィラー総数の 6.1%が「ハイ」であったことから、他の談話に比べても、多く用いられていると考えられる。

【表1】出現した主なフィラー

	教室談話1	割合(%)	教室談話2	割合(%)	2談話計	割合計(%)
アノー	26	2.63	75	7.29	101	5.00
エー	140	14.13	149	14.48	289	14.31
エート	15	1.52	18	1.75	33	1.63
ソノー	7	0.71	29	2.82	36	1.78
ネ	541	54.59	545	52.96	1086	53.76
ハイ	67	6.76	56	5.44	123	6.09
マア	131	13.22	112	10.88	243	12.03
その他	64	6.46	45	4.37	109	5.40
合計	991	100、00	1029	100.00	2020	100.00

4. 教室談話における「ハイ」

4.1 話題の転換場面における「ハイ」

資料中での「ハイ」は「それでは」や「それで」「で」「でね」のような接続表現[4]が後続することが多い。教室談話1では、67 例中 21 例(31.34%)で、教室談話2では、56 例中 20 例(35.71%)で「ハイ」のあとに上記のような表現が続く。これらの接続表現は、佐久間(2002: 162-177)では、「話題開始機能」、「話題終了機能」に分類され、「で」は「話題継続機能」の「話をそらす機能」にも、「じゃ」は「話題継続機能」の「話を変える機能」にも分類されている。このような接続表現と共起しやすいということは、話題が転換される場面(話題が開始する場面や話題が終了する場面)に現れやすいということがいえる。次の(1)は、「ハイ」のあとに、「では」が挿入される場面の例である。

[3] 教室談話1、教室談話2の内訳は、「ネ」がそれぞれ 541 例(54.59%)、545 例(52.96%)、「エー」が 140 例(14.13%)、149 例(14.48%)、「マア」が 131 例(13.22%)、112 例(10.88%)、「ハイ」が 67 例(6.76%)、56 例(5.44%)、「アノー」が 26 例(2.62%)、75 例(7.29%)であった。

[4] 本稿では「接続表現」という用語を佐久間(2002: 162)に従い、「文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文論の接続語、接続句に相当する概念」として定義する。

(1)

172[5]	T[6]	海水面が下がると下に隠れていた陸地が出てきて ネ こんなふうに陸続きになるわけです ネ
173	T	1万年前ごろに 約 アノ 氷河期が終わりまして ネ エー 氷が溶けて海の水位が上がりました
174	T	それで ネ つながっていた部分が水没して ネ 日本は島国になったわけですと ネ 氷河期
175	T	ハイ では ネ そろそろ ソノ 人間の話をやりましょうか
176	T	今のは地面の話ですから ネ

(教室談話1)

先行文脈で、氷河期に日本と大陸が接していた理由を説明し、その後氷河期の終わりとともに日本は島国になったという話をしている。そこで 175 が挿入され、176 からの話題は、人間の話題へと移る。ここでは、ある話題から別の話題へと移る「話題の開始」の場面に挿入されているといえる。次の(2)も「ハイ」に「では」が続く場面である。

(2)

356	T	エー 縄文時代の特徴は ソノー そのページの上に載ってますからね
357	T	縄文時代と弥生時代の比較というかたちで ネ
358	T	この表いっこ覚えてしまえば マア 僕の言ったことはだいたい網羅されてるんですけどね
359	T	ハイ ではこの紀元前4世紀頃になるともう縄文時代も終わりを告げますネ
360	T	次にやってきたのが弥生時代です ネ
361	T	エー この紀元 紀元前4世紀から ネ もうキリストが生まれてしまいまして ネ 紀元 エー 3世紀ごろまで

(教室談話2)

先行文脈では、縄文時代の説明が行われている。そこで 359 が挿入され、361 以降は、弥生時代の話題へと移っていく。ここでは、話題の終了を示していると考えられる。

以上のように、「ハイ」は話題が転換する場面で現れやすく、「話題の開始」と「話題の終了」のどちらにも現れうることが分かる。4.1.1 では、話題の完成との関わりで、このような場面に現れる理由を考察する。

4.1.1 話題の完成を示す「ハイ」

4.1 で述べたように「ハイ」は、話題が終了する場面と、話題が開始する場面のどちらで

[5] 数字は、発話番号を示す。
[6] アルファベットは発話者を表し、T は教師を、S は生徒を表す。

も現れる。どちらも、直前でひとまとまりの話題が終わり、次の話題へと転換される場面である。冨樫(2002:140)でも「ある程度話すべきひとまとまりの情報が完成している」場面で現れると述べているように、「ハイ」はひとまとまりの話題が完成したことを示しているようである。

次の(3)、(4)の例でも、それが示される。(3)では先行文脈で「アウストラロピテクス」の誕生の話をしており、その特徴を説明している。その後「ハイ」を含む111を発話し、その後112以降では、アウストラロピテクスの話は終わり、クロマニョン人の話へとうつる。また、(4)の例では、先行文脈で、旧石器時代の人々の生活や重要な遺跡の話をしており、245で「これが旧石器時代というお話でした　10万年前から約1万年前まで」と話を終えたことを明示的に示し、247以降は新石器時代の話へと移る。どちらも、話すべき話題が終わり、次の話題に移っていく場面である。そのため、ここでの「ハイ」は伝えるべきひとまとまりの情報が完成したことを示すといえる。

(3)

110	T	ことばを使って　ネ　エー　他者　他人とコミュニケーションをとる　ネ　それがまたひとつ動物と人類の違うところです
111	T	ハイ　マア　そういうことをね　できる人類といえるものは400万年前アウストラロピテクスという種が誕生しました　ネ
112	T	デ　マア　そのあといろいろいろいろ進化してくるわけですが　ネ

（教室談話1）

(4)

242	T	このあとの時代にもそれぞれ代表する遺跡があるんですけど　ネ　どの遺跡がどの時代のものなのか　どこにあるのか　それぐらい　覚えててください
243	T	この地図一枚ぺろっと覚えりゃ結構です　ネ
244	T	大事ですよ　遺跡の場所と特徴は
245	T	ハイ　マア　これが旧石器時代というお話でした　ネ
246	T	10万年前から約1万年前まで

（教室談話1）

上で述べたように「ハイ」が「ひとまとまりの伝えるべき情報が完成したことを示す」のであれば、内容がまとまっていなく、一つのトピックが続いているような場面では「ハイ」が挿入されないはずである。ここで、内容が連続的な場面で「ハイ」を用いるとどうなるか考察する。次の(5)は、話題が連続している例である。先行文脈で旧石器時代の特徴として打製石器をあげる。その後、この時代の暮らしの特徴として採集をあげ、それらの説明をしているものである。ここでは「ハイ」は一切用いられていない。このように話題の連続している場面である(5)の219に「ハイ」を挿入したものが(5')である。

(5)

215	T	採集というのは そのへんに ネ 生えてる木の実など草など食えそうなものを集めてきて食うってことですね
216	T	つまり この狩りも採集も根っこの部分は一緒ですよね
217	T	そこにあるものをもってくるんです ネ
218	T	動物もそこにいるものをつかまえるんですね
219	T	エー 木の実や野菜っていっていいものがあるかどうかは分かりませんがネ 植物などもそこにあるものをもってくる ネ

(教室談話１)

(5')

215	T	採集というのは そのへんに ネ 生えてる木の実など草など食えそうなものを集めてきて食うってことですね
216	T	つまり この狩りも採集も根っこの部分は一緒ですよね
217	T	そこにあるものをもってくるんです ネ
218	T	動物もそこにいるものをつかまえるんですね
219	T	#ハイ エー 木の実や野菜っていっていいものがあるかどうかは分かりませんが ネ 植物などもそこにあるものをもってくる ネ

(教室談話１、219に「ハイ」を挿入)

(5')は、教室談話の教師の発話としては、私語の多い教室でない限り不自然[7]といえる。一方、(5)の215から218を同じにし、219にひとまとまりの話が終わっていることを示す表現[8]である「以上のように」を挿入した(5")では「ハイ」が自然になる。

(5")

215	T	採集というのは そのへんに ネ 生えてる木の実など草など食えそうなものを集めてきて食うってことですね
216	T	つまり この狩りも採集も根っこの部分は一緒ですよね
217	T	そこにあるものをもってくるんです ネ
218	T	動物もそこにいるものをつかまえるんですね
219	T	ハイ 以上のように エー 木の実や野菜っていっていいものがあるかどうかは分かりませんが ネ 植物などもそこにあるものをもってくる ネ

(教室談話１、219行目のみ作例)

(5')のように、一続きの連続する文脈のなかで「ハイ」を挿入すると不自然となり、そこに、ひとまとまりの話が終わっていることを示す表現を挿入すると、「ハイ」が自然になることから、「ハイ」には「ひとまとまりの話題が完成したことを示す」ことがあるといえる。

[7] (5)のいずれの発話文に挿入しても、不自然になる。
[8] メイナード(2005: 312)でも「総括」の接続表現とされている。

4.2 注意をひきよせる「ハイ」

4.1では「ハイ」が「ひとまとまりの話題が完成したことを示す」ことを主張したが、本節では、それでは説明できない、「ハイ」の機能を見ていく。(6)は、それまでの話を一度区切り、生徒に対して発問するという場面である。

(6)

261	T	ハイ では まずは何をもって新石器時代とゆうかですね
262	T	さっき旧石器時代は打製石器と言いましたけど 当然新石器時代には何か新しい石器がでてくるわけですね
263	T	[板書をしながら] それは何かといいますと ネ エー これまあみなさんが写すことを無視して書いてるので ネ ちょっと変ですけど エー 磨製石器と言われているものです
264	T	ハイ 磨製石器の磨はなんですか
265	S	磨く
266	T	磨く そうですね つまり石をたたいて割るのではなくて 磨いてけずって望みの形に近づけると そういう エー 手法で作られたものを磨製石器といいます

(教室談話1)

ここでは、263から266まで磨製石器の話題であり、「ハイ」が挿入された264の前後で、話題が異なるとは考えられないため、ここで「ひとまとまりの話題の完成」を示すとは、考えにくい。むしろ、この発話の後に続く265以降で、磨製石器の説明が続く。ここでは、263までは、講師が説明をしていたのに対し、264で発問をして返答を促すという「指示」をするために、一度流れを区切っている。「ハイ」には、石井(1997: 23)で述べられているように、「教師が次の指示のためにそれまでの流れを区切り、注目を引きつけるという機能」があるためだと考えられる。ここで、同じ場面で、発問とそれに対する生徒の応答を削除し、同じ場面に「ハイ」を挿入できるか考えてみたい。

(6')

261	T	ハイ では まずは何をもって新石器時代とゆうかですね
262	T	さっき旧石器時代は打製石器と言いましたけど 当然新石器時代には何か新しい石器がでてくるわけですね
263	T	[板書をしながら] それは何かといいますと ネ エー これまあみなさんが写すことを無視して書いてるので ネ ちょっと変ですけど エー 磨製石器と言われているものです
264	T	#ハイ 磨製石器の磨は磨いて作ったの磨です
266	T	つまり石をたたいて割るのではなくて 磨いてけずって望みの形に近づけると そういう エー 手法で作られたものを磨製石器といいます

(教室談話1、264を改変、265を削除、266の一部を削除)

(6')は、(6)の応答場面(264-265)を削除し、「ハイ」を挿入したものである。(6)よりも(6')のほうが不自然に思われる。4.2 で議論したように話題が連続している場面では、「ハイ」は現れにくいと考えられることから、話題が連続している場面である(6')のような場面で「ハイ」を挿入することが不自然になることが説明できる。しかし、(6)のように、話題が連続する場面であるのにもかかわらず、発問があれば「ハイ」の挿入が可能になる。また、次の(6")のように、「ハイ」の後に、指示が続く場合も自然になる。

(6")

261	T	ハイ では まずは何をもって新石器時代とゆうかですね
262	T	さっき旧石器時代は打製石器と言いましたけど 当然新石器時代には何か新しい石器がでてくるわけですね
263	T	[板書をしながら] それは何かといいますと ネ エー これまあみなさんが写すことを無視して書いてるので ネ ちょっと変ですけど エー 磨製石器と言われているものです
264	T	ハイ ではプリントの5ページを開いてください。

(教室談話1、264を改変)

発問や指示がある場面とない場面を比較すると、発問や指示のある場面のほうが「ハイ」の使用がより自然になることから、「発問」や「指示」と何らかの関わりがあると考えられる。「発問」や「指示」といった行為は、生徒の注目をひきつける必要があるが、これらの行為が行われる場面で「ハイ」が現れるということは、石井(1997a)で言及されているように、「ハイ」には、「注意をひきよせる機能」があるといえる。また、「ハイ」の後に、大切な事項が続くこともある。その場合は、「大事ですよ」のような表現が前後に明示的に示される。したがって、「ハイ」は、後続する要素が大切な事柄であることを示すマーカーにもなり得ると考えられる。

また、「ハイ」は(7)のように「それた話題を元に戻す」場面で用いられることもある。

(7)

618	T	だから今でいうところの ソウダナア 村とも違うなあ 行政じゃない
619	T	暴走族グループ
620	T	いっちゃえば ネ 暴走族ですね
621	T	暴走族はまわりの暴走族をやっつける際に大きくなる
622	T	そんなイメージ ネ
623	T	実際 ソノネ また国の指導者は豪族や王となって力を持つようになったネ
624	T	この豪族や王ってのは はっきりいって 今言ったように暴走族団のトップぐらいの エー 意味でしかないわけですね

625	T	今の日本の総理大臣とか ああいう人とは全く根本的に違うわけです ネ
626	T	ハイ うんで そんで そうやって次々に ネ エー 村というのが ネ エー 合併していって国という単位のものがいくつかできてきたわけですが ネ エー そのなかでひとつ ネ エー 日本のなかで大きな力をもつ国というものができてきました ネ
627	T	それが何かというと ネ 卑弥呼率いる邪馬台国という国です ネ

(教室談話２)

(7)では、強い村が弱い村を従えてそれが次第に国になるという文脈で、619 から 625 では暴走族を例に説明している。そこで 625 の「ハイ」が発話され、話は 618 以前の話に戻る。つまり一度そらしてしまった話を、元に戻す場面であると言えるだろう。そのような場面で「ハイ」が挿入されるのは、「ハイ」には「それた話題をもとに戻すマーカー」としてはたらく機能もあるといえる。

4.3 話題の完成を示す「ハイ」と注意を喚起する「ハイ」との関わり

4.1、4.2 で、「ハイ」には大きく「ひとまとまりの話題が完成したことを示す」機能と、「注意をひきよせる」機能があることを述べた。本節では、これらの関係を考察する。どちらの機能も、授業を教師の意図通りに進めていくことと密接に関わっている。前者は、「ハイ」を挿入することで、大きな授業という枠組みのなかに、組み込まれる各話題が終わったことを示すことで、聞き手が次の話を聞く準備をすることができる。また、話題の切れ目がどこか分かることで、授業の内容をより理解しやすくなる。それにより、聞き手の意識を教師の意図するある話題に集中させることができる。また、後者では、教師の意図する質問や指示をするため、話していた話題を一度区切り、聞き手に発話をさせる。

また、どちらの機能も、授業の流れを一度区切る場合に用いられている。応答詞ではない「ハイ」の本質的な機能として、「話を一度区切る」という機能があり、それにより、上述したような機能が現れてくるのだと考えられる。

4.4 教室談話における「ハイ」の機能

4.1 から 4.3 で述べてきたことをまとめると次のようになる。まず 4.1 で述べたように、「ハイ」は話題の転換場面で現れ、ひとまとまりの話題がある程度完成したことを示す。また、4.2 で述べたように、「ハイ」は、一度流れをとめ、聞き手の注意をひきつけ講師の意図通りに次の指示や質問をしたり、大切な事項を述べるマーカーとなる。また、それた話題を元に戻すマーカーとしてはたらいたりするといえる。これらの機能をまとめると(8)のようになる。

(8) 教室談話における「ハイ」の機能

話題完成：話題の転換場面で現れ、ひとまとまりの話題がある程度完成したことを示す

注意喚起：a. 聞き手の注意をひきつける機能

a-1. 講師の意図どおりに、次の指示や発問をする(発問・指示)

a-2. 大切な事項を述べるマーカーとなる(重要項目)

b. それた話題を元に戻すマーカーとしてはたらく(軌道修正)

本稿で分析した資料で、出現した「ハイ」の出現回数をまとめると表２のようになる。

【表２】出現した「ハイ」の機能

	話題完成	注意喚起			その他	計
		指示・発問	重要項目	軌道修正		
出現回数(回)	82	10	6	15	7	120
割合(%)	68.33	8.33	5.00	12.50	5.83	100.00

表２からも、教室談話において、話題の転換を示す機能は、中心的機能といえるだろう。話題の転換を示す「ハイ」が多数を占める(68.33%)ことが分かる。一方、「指示・発問」や「重要項目」は聞き手の注意をひきつける機能に分類され、合計すると 16 回(13.33%)現れている。本稿で用いた資料は、教師が生徒に答えさせる場面が少ない(ほとんど教師の話で授業が進む)ため、指示・発問場面における、「ハイ」は少なかったと考えられるが、他の教室談話を用いた場合、傾向が変わることも考えられる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、応答詞でない「ハイ」が教室談話に特有であるという観点から、その機能を明らかにすることを試みた。本稿で明らかになった点を以下にまとめる。

① 話題の転換場面で現れ、ひとまとまりの話題がある程度完成したことを示す機能がある。

② 聞き手の注意をひきつけ、講師の意図通りに、次の指示や発問をしたり、それた話題を元に戻すマーカーとしてはたらくというような機能がある。

「ハイ」を教師が挿入することによって、聞き手である生徒が、教師の話を理解するのに役立っているのではないかと考えられる。そして、これは、誰に教わるともなく、教師が無意識のうちに行っている。

たとえば、①では「ハイ」が挿入されることによって、そこでひとまとまりの話題が終わったことを認識でき、理解が助けられる。教室で授業を受ける者にとって、話題がどこで区切れるかを認識できる。そして、そこまでの内容が理解できているか自己確認し、次の話題への準備ができる。しかし「ハイ」が挿入されないと、どこで話題が区切れるか分

からなくなってしまい、自己確認の機会を失ってしまい、理解できているのかどうかも分からずに進めてしまう。また、②も、教師が発問や指示などをするときに、その前段階として、聞き手の注意をひきよせることができる。

「ハイ」がこのように用いられることを知ることで、非日本語母語話者が、教師の発話を理解したり、教師の指示に注意をしたりするのに役立つ。

本稿で、分析した資料は、1名の談話に過ぎず、上で述べたことが、普遍的にいえるかどうかを見極めるには、さらに資料を増やしていく必要がある。

また、本稿で述べたように、教室談話では「ハイ」は限定的な機能をもって用いられ、どちらの機能においても、一度、話を区切る場面に出てくることから、「ハイ」には談話を管理していくことと密接な関わりがあると考えられる。従って、談話管理の観点から、「ハイ」の役割を考察していく必要があると考えられる。

本稿では、教室談話における機能を述べたが、なぜ「ハイ」が他の談話に比べ、教室談話に現れやすいのかを説明できていない。(8)のような機能を持つのであれば、中心的機能のような役割を持つ「ハイ」が発表や講演などで、現れるはずだが、実際はほとんど出てこない。ここで述べた機能には、発話された情報に深い関わりがあると考えられるため、何らかの聞き手に対する情報配慮の有無により、変わってくるのではないかと考えられるが、仮説の域を出ない。今後さらに資料のバリエーションを増やし、考察していく必要がある。

【参考文献】

石井恵理子(1997)「教室談話の複数の文脈」『日本語学』第16巻第3号、明治書院、pp.21-28.

――――(1996)「教室会話に見る教師の意識と子どもの受けとめ」『聴解過程の解明』(文部省科学研究費補助金(一般研究(B))「日本語教育と国語教育における聴解過程の解明—教室談話の観察と分析による—」研究成果報告書)、pp.41-52.

熊谷智子(1997a)「教師の発話にみられるくり返しの機能」『日本語学』第16巻第3号、pp.30-38.

熊谷智子(1997b)「はたらきかけのやりとりとしての会話　特徴の束という形でみた「発話機能」」茂呂雄二(編)『対話と知–談話の認知科学入門』新曜社、pp.21-45.

甲田直美(2001)『談話・テクスト展開のメカニズム–接続表現と談話標識の認知的考察–』風間書房.

佐久間まゆみ(2002)「接続詞・指示詞と文連鎖」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語の文法4　複文と談話』岩波書店、pp.116-189.

冨樫純一(2002)「「はい」と「うん」の関係をめぐって」定延利之(編)『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房、pp.127-157.

田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版、pp.257-279.

野村美穂子（1996）「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語―フィラーに注目して―」『文教大学教育研究所紀要』第5号、文教大学付属教育研究所.

メイナード、泉子・K（2004）『談話言語学』くろしお出版.

メイナード、泉子・K（2005）『談話表現ハンドブック』くろしお出版.

森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』大阪大学文学部日本語学科（言語系）、 pp.63-88.

茂呂雄二（1991）「教室談話の構造」『日本語学』第10巻第10号、明治書院、pp.63-72.

――――（1997）「発話の型　教室談話のジャンル」茂呂雄二(編)『対話と知-談話の認知科学入門』新曜社、 pp.47-75.

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.

Schiffrin、 D. (2002) Discourse Markers: Language、 Meaning、 and Context. In: Schiffrin、 D. et al. (eds.) *The Hand Book of Discourse Analysis*、 pp.54-75.